

# 遠藤周作の留学

## —— ルーアン、リヨン、ボルドー ——



### 1. ルーアンまで

遠藤周作は、1950年6月4日午後10時、フランス船マルセイユーズ号で横浜を出発した。この留学を『作家の日記』を手がかりに振り返ってみたい。

遠藤たちを乗せた船は、途中、香港、マニラ、サイゴン、シンガポール、コロンボ、ジブチ、スエズ、ポートサイドなどを経て、7月5日朝7時マルセイユに到着する。

遠藤は、4等船室ですごした短い旅のあいだに戦後のアジアとアラブの世界を経験する貴重な機会をえた。

マルセイユに上陸した遠藤は、ネラン神父の出迎えをうけ、マルセイユとリヨンに一泊し、パリを垣間見て、7月8日午後3時ルーアンに到着、ロビンヌ夫人と子どもたちに迎えられる。

7月22日の日記には「ロビンヌ一家の好意は今更感謝してもしきれぬ程大きい。細かな心づかい、やさしい愛情、かつてぼくはこれほど精神的な家庭をみた事はない」という記述が見られる。言葉を読むことはできても、話すことも聞くこともできない異国の地で、留学生がこのように幸運な一歩を踏み出すことは、かつて今も、稀有のできごとである。

2ヶ月あまりのルーアン滞在のあいだをぬって、8月5日、遠藤はロビンヌ家の長男ギーとともに、国際カトリック学生キャンプに参加する。このキャンプは、シャルル・ペギーを偲ぶ、シャルトル大聖堂への巡礼からはじまった。

厳しい戦争の痛手から回復したフランスのカトリック青年たちは、若々しい希望に満ちていたし、カトリック自身も、雑誌「エスプリ」や労働司祭たちの運動に見られるように、自らの再生を信じていた。

ルーアンでジャンヌ・ダルク終焉の地を訪れ、ペギーを読んだ遠藤は、このキャンプで、新しいカトリックと青年たちの情熱を実感したにちがいない。

この時期の遠藤の読書は、ペギー、ダニエル・ロプス、ジッド、クローデル、ジュリアン・グリーンなどのキリスト教作家が中心だが、カミュについてシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』を読み始めている。遠藤は、ボーヴォワールを通じてサドへの理解を深めていくのである。

フランス到着早々、原稿の依頼も受け取る。「雄鶏通信」「婦人倶楽部」の原稿は、航空便でやりとりされる。船旅は1ヶ月かかったが、手紙や原稿は数日で届く、それは現在とあまり変わらない。そんな「滞仏文芸評論家・作家」生活がすでに始まっていたのである。

遠藤は、9月11日午後2時半、ロビンヌ家の人々に見送られてルーアンを発ち、途中パ

りに一泊して、9月12日の午後6時半、リヨンに到着する。通過したパリでの目的は、ルケの『マルテの手記』の跡を追うことだった。1952年の10月3日にパリ日本館に落ち着くまで、遠藤にとってパリはいつも心を惹きつけ、刺激する、通過地点だった。

## 2. リヨンの友と「フォンスの井戸」

リヨンに着くと、再びネラン神父の出迎えをうけ、しばらく神学校に滞在する。9月16日には国際カトリックキャンプに参加した仲間から、さっそく招待される。10月4日に大学近くのクラリッジ館に引っ越す。部屋の整理の手伝いをしてくれたミシェル、アンドレなどの寮生と、親しくなる。

10月13日に遠藤はラジオを買う。寮生たちは、ひんぱんに遠藤の部屋におしかけ、ラジオを聴いたり、酒を飲んだりする。10月6日の日記にみるように「兎に角、ここの学生はさっぱりしていて気持ちがいいもんだ」というのが遠藤の当初の印象であり、この時芽生えた友情は、リヨン滞在の二年間をとおして大きく変わることはなかった。

11月13日の日記に見られる研究計画には、①ジッドと闘った「大戦前のカトリック文学」のジッドの克服のしかたを、ジャック・リヴィエールとシャルル・デュ・ボスを中心に考えることと、②シモーヌ・ド・ボーヴォワールをさらに学んでサドの伝記を書き〈情欲論〉を深めること、の二つが記されている。

リヨンでの遠藤の読書には、雑誌「エスプリ」とともにカミュ、サルトルの作品が多く登場する。

そして12月に入ってシャルリ・ギヨの『現代アメリカの作家』を読むことで大きな転機が訪れる。当時フランスで読まれ始めていたフォークナー、スタインベックなどアメリカ作家への傾倒が始まるのである。この傾倒に拍車をかけたのが、クロード・エドモンド・マニーの『アメリカ小説の年輪』であり、サルトルの『文学とは何か』や『シチュアション』におさめられたアメリカ小説論であった。

遠藤はマニーの「内面生活というものには存在せず、心理面にいかなる現実もなく、意識は重要でない」という指摘に大きな衝撃をうける。彼はこれによって、自分がやっと見つけた文学方法「罪の根元に遡る事」が必然的に無視されることになると思ったのだ。

しかし、その一方でこうも考える。

「今日の人間は分析の予断をゆるさぬものをもっている。意識のしきみの下に、分析不可能の深遠がある。」この深遠の存在は、マルキシズムも精神分析もともに認めるところである。この深遠（＝無意識）をつきつめようとしている所から「分析小説決別」が起こったのではないか。こうした文学理論の迷路の探求のさなかに起こったのが「フォンスの井戸」事件であった。

1951年3月21日、復活祭前の休暇を利用して遠藤はクラリッジ館で出会った友人アンドレの故郷アルデッシュのヴァル＝レ＝バンを訪れる。この時、アンドレの兄が語ったレジスタンス運動の悲劇が、遠藤にはじめての小説を書かせることになった。

アンドレの兄によれば、マキと呼ばれたレジスタンスの武装勢力が、対独協力者ではないかと疑われた者たちを、裁判にもかけず、トラックに乗せて山奥の井戸まで連行し、虐殺したというのである。ファシズムへの抵抗とユマニズムの象徴であったはずのマキの蛮行は、遠藤に衝撃を与えた。

翌日、遠藤とアンドレは、事件をつげる新聞の切抜きをたよりに、自転車でフォンスまで出かけた。

「フォンスは山また山の寒村なのだ。梅や桑や葡萄の畠にかこまれた戸数十二戸位、ぼくたちがついた時は日が翳り、畠に一人の百姓が働いているきり村は死んだように静かだった。」遠藤とアンドレは、さらに一キロ以上のぼって井戸を見つける。

「この井戸を見るためにこそ、私は此のアルデッシュまで来たのである。それは入口が二米の四辺形になって捨てられた井戸であった。松の樹は弾丸のあとが残り、松やにが痛々しくふいている。弾丸の残っている樹の数は六本、各樹には四つの弾痕が残っている。井戸の中に石をアンドレが投げると、六秒後に、何かはねかえる音がし、それから水のしぶきが聴こえた。その下に虐殺された数十人の死体があるのである。」

3月26日朝、リヨンのクラリッジ館にもどった遠藤を待っていたのは、原民喜の死を知らせる島崎通夫の手紙と原民喜の遺書だった。遺書には「これが最後の便りです。今年の春は楽しかったね。ではお元気で・・・」と走り書きがあった。

翌27日、スシイ神父と彼の故郷のブルジュにむかう。汽車の中で原民喜のことを、しきりに思う。ブルジュでは、神父の両親の歓迎をうけ、ブルジュの町や、周辺の散策をして、ベルナノスの墓に詣でたり、アラン・フルニエゆかりの城やノアンのジョルジュ・サンドの家を訪ねて、4月3日にリヨンに帰る。文学好きのスシイ神父に慰められた一週間だった。

そして4月11日には、「フォンスの井戸」の草稿を終える。しかし、この小説は、なかなか手ごわくて、4月13日にはこんな記述がある。

『フォンスの井戸』を読みかえして、どうも、やはり、平面的なのでここに一人の、ポーランド青年を入れる事にした。

- 1 イレーナとの遭遇場所を、ダンス場にする事
- 2 旅行は二人ではなく、三人で行った事にする事
- 3 フォンスの井戸の前で、青年はイレーナを犯す事

方法としては、フォークナーの技法をまねするより仕方あるまい。唯、この作品の難点は、ぼくの技術が、読者をどこまで瞞すかにある・・・。」

こうした、試行錯誤は、さらに4月16日にもあらわれる。

『フォンスの井戸』。こびと（＝ポーランド青年）、中国の青年を入れた結果、ずっと厚みがついたように思われる。

- 1 陳青年との邂逅を最初におく事
- 2 会話の調子をなおす事

さらに4月29日には、

『フォンスの井戸』をかきつづける。午後、ナチの暴虐の展覧会を見に行ったが、それは恐怖すべきものだ。機械的な拷問の過程という事をこれだけ考えたということは・・・。幾百人の死体となると、もう、これは人間とは思われない。この印象を『フォンスの井戸』にどう生かすか・・・。」とある。

「フォンスの井戸」執筆に関する記述はこれで終わるので、遠藤がいつこの作品を書き上げたかは不明であるが、この記述を読むと、当時の遠藤が、小説というものをどう考えていたかがよくわかる。

「フォンスの井戸」は、後に「フランスにおける異国の学生たち」と改題されて雑誌「群像」の1951年9月号に発表され、さらに1953年7月に『フランスの大学生』のなかに四つのルポルタージュの一つとして収録されたが、決してルポルタージュと呼べるものではない。やがて、遠藤のはじめての長編小説『小さな青い葡萄』として、同じ主題が、きわめて不器用な形で展開されていくのを見ても明らかである。

### 3. ボルドーの夏

復活祭の休暇が終わると、再びアメリカ小説やマニーの評論、クロソフスキーの『わが隣人サド』を読み、マルローを読み、「田舎司祭の日記」のような映画を見る生活が始まる。しかし、そのなかで次第にはっきりとしてくるのは夏休みを利用したボルドー旅行とモーリアックの作品の跡を追う旅の計画である。

6月13日には『テレーズ・デスケルー』と『夜の終わり』の再読にとりかかり、22日に読了する。『テレーズ』には感動し、『夜の終わり』には失望する。そして7月2日に書く。「この夏の計画はきまった。ボルドオで、モーリアックの人生を考える事とウィリアム・フォークナーの作品を7月中に研究しはじめる事である。暑さは、かえって、ぼくの頭脳を刺激する。」

そして7月中は、とにかく『八月の光』を読み続け、D.H.ロレンスの『アメリカ古典文学論』を読んで、8月1日にボルドーに向けて出発する。

途中、セートやカルカソンヌを経て、8月2日夜にボルドー到着。ただちに宿舎チヴォリ学院にむかう。ここに8月28日まで滞在し、夜汽車でリヨンに帰った。この間の記録は、1952年に「三田文学」1月号に発表された「テレーズの影をおって」と「群像」8月号の「ボルドオ」に詳しい。いずれも『フランスの大学生』に再録された。

まず「ボルドオ」だが、これは8月3日から16日までの滞在日記の形式をとっている。奇妙なことだが、『作家の日記』と読み合わせてみると、日付が微妙にずれている。

遠藤が、ボルドーでエマニュエル・ベエルの『ブルジョワジイとその愛』を買い、読み続け、ボルドーの町にモーリアック作品のなかでも『愛の砂漠』の主人公クレージュ医師と愛人マリア・クロスの跡をもとめたのは、彼の『日記』にもあるとおりだが、彼が実際に訪れたはずの作家モーリアックの足跡に関する記述は、ほとんど現われない。また、「ボルドオ」では、8月15日に訪れたことになっているランド地方の「砂漠」は、『愛の砂漠』の象徴としてのみ表現される。実際の遠藤がランド地方をさまよったのは、『愛の砂漠』よりも『テレーズ』の影をおう目的であったはずである。

こうしてみると作家遠藤周作の企みは明白である。「ボルドオ」では、日記のスタイルをかりて、都市ボルドーとその息詰まるような閉鎖的なブルジョア社会をスケッチし、『愛の砂漠』に密着し、作品の細部を息をひそめて描きつくす。

遠藤は、8月7日の「ボルドオ日記」をこう始める。

「だが、たしかにボルドオの暑熱の中には恐らくこの街の本質である臭い、疲弊した頑固な老人の体臭に似ているものがまじっている。」

8月8日の書き出しは、「この街にはどこにも出口がない。この街に生きるものは、港にいく以外に出口がない。」ボルドーは海港ではないし、海までは砂漠のようなランド地方が広がっている。

こうして「ボルドオ」は、いささかステレオタイプであるにはしても、都市論となり、作品『愛の砂漠』の批評となり、旅日記となった。見事なエッセーだといえるだろう。

つぎに「三田文学」の「テレーズの影をおって」だが、これは、1951年という時点で戦後フランス文学を語った評論として、最良の作品となったと思う。文芸批評家としての遠藤周作が、一年のフランス滞在をとおして、何を読み、何を考えたかが、よく分かる。

「ボルドオ」は、作者から友人クロード・ルロンへの手紙、クロードからの返信、そしてボルドーを取り巻く砂漠、ランド地方の彷徨の記録という体裁をとっている。

遠藤が、まず友人に語るのは、宿命のうちにただ横たわるモーリアックへの共感であり、人間の意志を越えて働く神の恩寵の力である。

「率直に言えば文学にとって今日まで、ブルジョワ社会ほど最良の温床はなかった事をぼくはハッキリとめします。人間条件のさまざまな角度を今日の衰退期のブルジョアほど発散した階級はないという確信がぼくにはあります。君は『まだ作家の裡に文学生活と社会生活とを分離するのか』とぼくを非難しました。しかし文学生活を狭義にとればぼくには、人間を凝視するというにつきます。この凝視の欲望が、もう一つのぼくの義務にさまたげられるとすれば！」というのである。

これに対してクロードは、サルトルを援用しながら、モーリアックの「凝視の欲望」を批判する。

「ねえ、君、ぼくは日本もそうだろうと思う。全く正義という事が失われた今日にぼく等が疑おうとしても疑えぬ悪が目の前にある。コミュニストであろうとカトリック者であろうとそういう主義の違いは別なのだ。ぼく等の周囲に無数の人間が、自由もなく人間的威厳も奪われて、存在しているということは、絶対に否定できない事実じゃないか。ぼく等は、彼等のため何かしなければいけないんじゃないか。」

「ぼくだって君と同じようにブルジョワ社会の文学的優越性を知っている。そして君と同じようにそれが供給する多くの人間的素材を凝視したい欲望があるのだ。しかしぼく等が彼等のために何かを犠牲にすべきだと思えば、まずこの凝視の欲望を犠牲にしよう。そうでなければ、ぼく等はどうして一九五〇年の世代と自らを呼ぶことができよう。」「ぼく等はぼく等の世代が次の者のためのとび石であることを忘れたことはない。とび石である故にある事を忍び、自分の欲望を犠牲にせねばならぬのではないだろうか。」

この友人の批判は、1951年という時代をつきぬけて、おそらく1968年の五月革命までは有効であり、フランスと日本の若者の胸をうつ力をもっていた。

作品「テレーズの影をおって」の三つ目のパートには、ランド地方の砂漠をさまよいながらテレーズと対話する遠藤の苦闘が綴られる。

8月16日にランドの旅を終えてボルドーにもどると、25日まで「ボルドオ」と「テレーズの影をおって」の執筆に集中する。そして8月26日から28日までカルメル会の修道院を訪ね、井上洋次に会い、29日にリヨンに帰る。

#### 4. エスプリ運動と病い

リヨンにもどった遠藤は、留学中でもっとも充実した時期を迎える。彼の読書は、「エスプリ」の論考やムーニエの『人格主義とはなにか』に加えて、メルロー＝ポンティの『ヒューマニズムとテロル』、ジャン・ラクロワの『マルクス主義・実存主義・人格主義』、カ

ミュの『反抗的人間』『正義の人々』、サルトルの『唯物論と革命』など、目の前の政治的現実と格闘するアクティブな論考に集中する。ボルドーへの旅で『テレーズ』と正面から向き合い「テレーズの影をおって」を書き上げ、その核心を体で理解した遠藤は、今度はクロードの提起した批判に、体をはって答えようと考え始めたのだ。

この時期の遠藤は、読書の人から行動の人に変貌する。

彼は、まず10月24日に、島崎通夫に「帰国後のことにつき」手紙を書く。これは日本で雑誌「エスプリ」を翻訳し、エスプリの運動を展開する行動計画を伝えるものである。そして12月1日には、ジャン・ラクローの主催するリヨンの人格主義の会に出席し、行動を開始する。12月14日にはパリにむかい、一週間滞在して「エスプリ」編集部を訪れ、編集部のドムナックやアルベール・ベガンに会い、日本におけるエスプリ運動の紹介計画の打ち合わせをしている。

しかし、魂の高揚とは裏腹に、体力は衰え、12月3日には血痰をはく。そしてパリ滞在の疲れのた 21 日にも、再び血痰がでる。皮肉なことだ。

その後の遠藤は、1952年春までは、「エスプリ」に希望を託すことをあきらめず、激しい読書と行動を続けるが、復活祭の休みに療養をかねてアルプスの小さな村に滞在したあたりから、はっきりと読書の傾向がかわってゆく。

リヨンに帰った遠藤は、4月21日の『日記』に書く。

「体の衰弱、死の恐怖が、それ以外の他の問題をもう考えさせない。一日中、ぼくは自分の衰弱、息ぐるしさしか、考えていない。たとえば『ルモンド』紙を開いても、『現代』誌を読み始めても、現実、社会、プロレタリア、戦争——それは、もうぼくの心を掴まない。掴むのは、体の不安である。」

同じ年の3月22日に「主よ、ぼくに勇気をお与え下さい。淡い、あだ花のような言葉を少なくともここに書かせて下さいますな。一日一日が進歩であり、人格の拡充であるように、ぼくの人生を導いて下さい」と祈っていた遠藤の急速な気力の衰退がそこにみえる。

遠藤は、5月1日からリヨン郊外のコロンジュにあるネラン神父の実家で休息した後、6月19日にリヨンをたち、アルプスの麓コンブルーにある国際学生療養所に9月中旬まで滞在し、再びリヨンを経て、10月3日にパリ日本館に居を定めた。

これ以降の留學生活は、短編「ジュルダン病院」、エッセイ「帰国まで」、死後に公表された「滞仏日記」などに詳しい。

1950年7月5日にマルセイユに着き、1953年1月12日にマルセイユを離れた遠藤周作の留學は、その病いをも含めて実り多く、幸せなものであった。